

寺を開く、人と出会う

しゃらりん

36

2020/6

ハニメテ死スハサラニ疾ヲ生シハニメテ
ホカニ疾ヲ生シハニメテ
ハニメテ死スハサラニ疾ヲ生シハニメテ



集おういのちのサंगा

ちょっと聞いてこ、お寺で話を。



教化委員会3年間を振り返って

新教化体制が発足して今年度末で早くも3年。刷新された教化委員会で1期目を終えられた総合調整局長、ならびに各専門部の幹事みなさんに、総括を寄稿していただきました。

総合調整局

宮部 渡（第15組西稱寺）

旧体制の「企画部」から現体制の「総合調整局」への組織変更にはいくつかのポイントがありました。一番の変更点は、あて職中心の人員構成から各専門部幹事を中心に構成された、いわば現場を担う方々の組織へと変わった点です。

これにより、今まで自分の関わる部会中心の報告会であった幹事会を、教区教化をお互いに俯瞰しあいながら、「現場が主役つながらる教区教化」の掛け声のもと、互いを見つめなおし、教区教化全体の問題として、文字どおり調整をはかっている場となり得たことです。

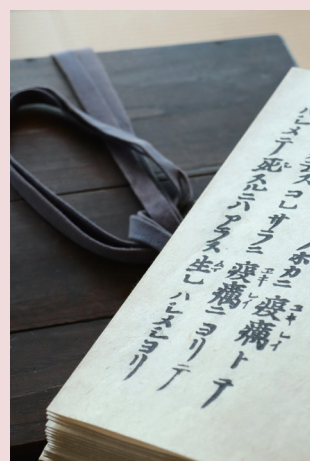
策定委員会からの狙いであった、

コーディネーター部門を中心に、いわゆる内向きの学習を脱皮し、現場に出向く教化を念頭に企画が組まれていきました。そしてそこには必然と専門部間の枠を超えた動きも徐々に見られるようになってきました。

まだまだ試行錯誤で十分な成果とはいきませんが、各専門部会からの報告のとおりその第一歩を踏み出したことは間違いありません。

この歩みを次期を担ってくださる方々に十分ご理解いただき、さらに推し進めていただきたく思います。コロナ禍により、引継ぎの簡略化を余儀なくされました。次期教化委員の方々には我々に遠慮なくおたずねくださり、また、我々も協力を惜しまない覚悟でおります。どうぞよろしくお願いいたします。

表紙について



表紙は蓮如上人の「疫病えきぐれいの御文おふみ」です。この御文の末尾には「延徳四年六月」と日付が記されてあります。これは西暦1492年にあたります。この時に大流行して人々がたくさん亡くなった「疫病」が、具体的にどんな疫病だったのかは定かではないようです。

しかし蓮如上人が「当時このごろ、ことのほかに疫病とてひと死去す。これさらに疫病によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり」と言い切られたその言葉は、コロナ禍におおわれた世界を否応なく生きる私たち、遙かな時を超えて響いてきます。この御文の示す意味を、今だからこそ伝えていかなければならないのではないかという思いのもと、表紙とさせていただきます。

儀式・法要部

新川隆教（第21組西向寺）

この3年間の事業を通して「出向く」と「コーディネート」ということが言われてきました。儀式・法要部では各組や寺院より依頼を受けて開催する事業が多いのですが、その案内を同じ教化委員会各部門より協力して発信していただけたというのがもつともよかったことです。その結果、「寺院儀式相談室」では仏花、落慶法要、念珠製作等、依頼の項目や回数が増えました。

また、本山・別院や教区内諸団体と共催する事業も多く、「登高座作法講習会」では本山より伝授師、教授師を迎えて天満別院にて開催し、その地域の方に特にご参加をいただきました。この後も5年間隔で難波別院を主にしながらも各別院で開催していくことを願っています。「子どもの集い（大）」や「子ども報恩講」では難波別院、「得度受式後講習会」では八尾別院、また各種講習会では青少幼年部や准堂衆会、温雅会、児

童連盟とたくさんの方の協力体制ができました。

しかし、儀式法要部として実質的に目標にしてきた各寺院での御遠忌法要の厳修の増加、「子ども同朋唱和講習会」の開催における寺院子ども会の発足の願いは、まだまだ達成には程遠いことです。幹事として参加した総合調整局でも、教区全体の事業を中長期的に見据えてどこに重点をおいて課題とするのか、という視点で削減と新規事業の立ち上げ（スクラップ＆ビルド）をすることが必要であると感じます。私の反省も含めて、次期教化委員会委員の方々にも引き続き討議していただきたいと思っています。



研修・講座部

建部智宏（第7組教應寺）

「聖典講座 仏教学」は、従来は難波別院のみで行われておりましたが、2018年度より、天満別院へ出向き、開催させていただきました。それにより、今までの参加者に加え、天満別院のご門徒や近隣の方々、崇敬寺院のご門徒に参加していただけたことは「出向く教化」の成果であると考えます。

「同朋の会推進実行委員会」は、委員を対象とした専門講座を開催し、座談会の方法の模索や、教区内外の方々の様々な現場の声に学ぶ活動が続けてきました。そのうえで、委員が「聖典講座 真宗学」の座談会の司会や、「同朋の会推進講座（推進員養成講座）」にスタッフとして出向くこと、また「同朋の会サポート事業」では、実際に寺院に出向き同朋の会のお手伝いをする活動につながってきております。また、2018年度から2年にわたり「大阪教区同朋の会推進員連絡協議会（大推協）」との懇談



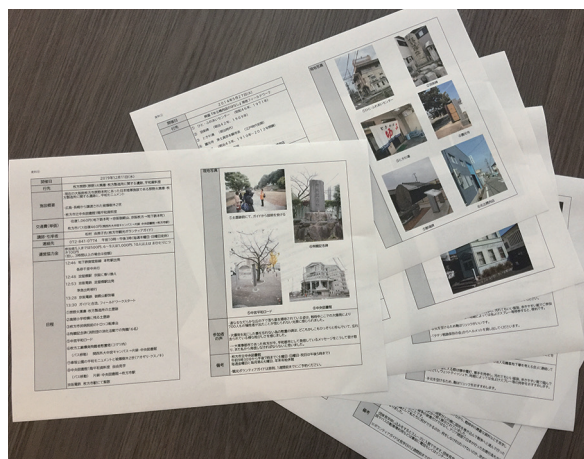
会を開くことができたことは、僧侶と門徒の垣根を越えて共に「同朋」ということを確かめる大切な場をいただけたと感じております。

旧行事部の事業であった「同朋大会」「全推進員の集い」なども、各実行委員会の任期が3年になったことにより、委員同士のつながりが深まり、1年ごとの引継ぎも必要なくなり、会議の進行もスムーズになりました。ある委員からは「3年という任期を生かし、それぞれ前年の活動内容を積み重ね、最後の年で完結するような展開があってもいいのではないか」という意見も聞かれ、今後、単年度ではできない事業の深まりが期待できると感じました。

社会・人権部

稲垣洋信（第7組長教寺）

新体制となった「社会・人権部」も早いもので1期（3年）経ち、改めて教化事業を振り返ると、充実した面もそうでない面もあった。充実したと思うことは、社会と人権に関する各実行委員会が今まで積み重ねてきた事業を行いつつ、組単位で展開されている人権学習会に向向してきたことや、その学習会の一助とするためにフィールドワークで訪れた場所を紹介する学習リーフレットを作成したことである。また、部事業として、所轄の実行委員会と組人権推進要員を対象に「お聖教に学ぶ差別問題」と題し『仏説観無量寿経』は旃陀羅、『御文』五従三障について学習座談の場を開いた。参加者それぞれに「無自覚に他人の足を踏んで、踏まれている方は「痛い」と言っているのにも関わらず、踏まれているものの傷みがわからずに踏み続けている」ということを自己の課題として意識できるように学習会となっ



たことである。

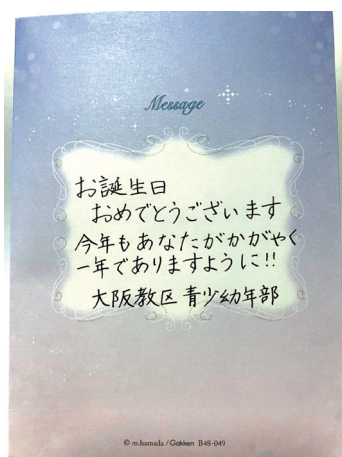
社会・人権部としての任は、現在取り組んでいる各実行委員会や、より細分化される現代の社会と人権の問題について、諸問題に通底する課題を見出し、親鸞聖人の精神を基に聞法学習発表の場を広げていくことだと思ふ。今期は十分ではなかったが、より充実が必要であると感じた。次期に望むことは、部内で諸問題に通底する課題について話し合い、各実行委員へはたらきかけ、更なる事業を展開されることである。組での人権学習会に向向く教化をさらに進めて、教区内寺族門徒へ発信できたらと思ふ。

青少年部

松井 敦（第21組圓徳寺）

大阪教区教化委員会の中で新設の青少年部では、「難波別院報恩講子ども出仕」のお手伝いと、「初参式」を立ち上げました。出向く教化として、子ども会や青年会への巡回をさせていただきました。儀式法要部との共催では「子ども同朋唱和講習会」や「得度準備講習会」などをさせていただきました。難波別院主催の「花まつり子ども大会」や「子ども報恩講」のお手伝いをさせていただきました。いずれもたくさんの子どもたちと出逢うことができました。

それ以上に大事にしたことは、子



どもたちに誕生日カードを発送し、そのぬり絵を送り返していただくことを続けたことです。私の子ども時代には、教区から子ども宛に手紙が届くことなどなかったですが、今の子どもはしあわせだと思えます。

2019年度後半には新型コロナウイルスが蔓延して教区のひとつの行事が中止や延期に追い込まれました。その中でも、緊急事態宣言で外に出て遊べない子どもたちに、クイズやぬり絵、トリックアートなどで楽しんでいただくために、誕生日

カードの発送を続けています。こんな時こそ何ができるか考える時だと思います。

次期教化委員の方は、少しでも多くの方に青少年活動へのご協力をいただき、これからの教区を背負って立つ子どもたちを成長させてあげるようにご尽力ください。

組教化推進部

山口知丈(第9組昭徳寺)

「つながる教化」で「ひろがる教化」各組独自の教化の取り組みを通して

今の大阪教区の教化体制の「現場」が主役。つながる教区教化」というあり方が、何を生み出していくのかを、探ってみたいと思います。まずは、「人権学習」です。ひとつは、昨年6月21日に開催された第9組人権学習会「発達障がいについて学ぶ」です。組の人権推進要員自身が抱える課題を、組全体で共有しようとするもので、講師の松井聡氏(第21組浄得寺住職)による体験を



踏まえたお話がなされ、その後、NHKが放映した「君が僕の息子について教えてくれたこと」のDVDを鑑賞。ふたつの貴重な事例から、自閉症の家族を持つことの重さとともに、自閉症の「心の声」に触れる学びの場でした。もうひとつは、今年2月12日に開催された第11組人権学習会「児童養護施設レバノンホームについて」です。会では、施設長の

栗本一美氏より、ホームの成り立ちや、そこで暮らす子どもたちの生活の様子をお話していただき、組門徒会の方々を含めた約40名が熱心に耳を傾けておられました。この学習会は、組長の玉井久之氏が長年温めてこられた課題で、組はもとより北摂ブロックへの参加の声かけがなされました。

次に、「教学・教化」についての組における取り組みです。第21組では、「法話を考える会」として2017年から全9回の学習会を実施されています。昨年12月18日にその最終回を迎え、村上宗博氏(京都教区山城第1組願教寺)を講師に「親鸞聖人最後の手紙『親鸞聖人御消息集』を紐解く」のテーマでお話をいただきました。宗祖晩年の心情をうかがい知ることのできる機会となりました。

これらの組独自の取り組みが、組教化推進部を通して「組教化委員長・同朋の会教導懇談会」等で紹介されるならば、教区全体で「課題の共有」が生まれることとなります。つながりが生む、教区全体への「ひろがる教化」。これが、今の体制のよさではないでしょうか。



広報・出版部

澤田 見（第12組清澤寺）

広報・出版部は以前の出版会議、ホームページ部、視聴覚伝道部、しゃらりん編集部から成る専門部会です。覚悟はある程度していましたが、その内容は多岐にわたり、なおかつ膨大でした。幹事としてなかなかすべての事業に目を配れなかったと反省しています。

出版会議はいままで独立した組織であったのを、教化委員会との連携を密にしていこうということで組み込まれました。出版物ごとにプロジェクトチーム的な実行委員会を作り、編集を行っていくという方針を立て作業してきました。しかし1冊の本を制作するには時間がかかり、3年目の今年にしてようやく形になってきました。『真宗門徒のお葬式』ブックレット版をこのたびの全寺院発送でお届けしています。また近々、平野修先生の『化身土巻講義』、『表白（敬白）例文集』などを発刊できるかと思っています。

ホームページ実行委員会では従来の『銀杏通信』の継続的な管理・運営と、月2回の「パソコン相談室」を行ってきました。コロナでの外出自粛もあり、ウェブ会議やリモートワークなど、ITを活用した組・寺院の活動への支援も積極的に行っていきたいと考えています。（本誌9ページもご覧ください）

視聴覚伝道実行委員会は教化に使えるお金も限られてきているなか、高額な予算を必要とする動画の制作も難しく、どのような活動をしていったらよいのか模索を続けていました。まだ結論は出ていませんが、映像制作以外でなにかできることはないかと考えています。

しゃらりん編集部は「広報コーディネート実行委員会」として教区の広報全般を受け持ちました。具体的には教区テーマ広報のための葉やクリアファイルなどを作っています。そのほか教区を広報する手段はないのか、こちらも模索中です。

ほんとうに活動内容がたくさんある部ですが、教化委員会内の連携という面では、教化体制の見直しの効果も確実に出てきているというのが実感です。

2017



2018



2019

歴代ポスターのデザインは赤松崇磨さん（京都教区近江第7組・遠慶寺住職）にお願いいたしました。

お寺の未来

寺カフェ・寺キッズ

第1組勝光寺・地域にひらかれたお寺へ

寺カフェを始めて5年目、寺キッズは2年目になります。

寺カフェは、西区地域包括支援センターが区内の各連合で開催している高齢者の「立ち寄り処」の民間版です。



100円の会費で近隣のお年寄りが毎月最終週の火曜日に本堂に集まり、訪問看護ステーションの作業療法士指導の下、楽しみながら健康体操を行います。元気な人はもちろん、リハビリ中の人もニコニコ笑顔が絶えません。その後、区保健センターや包括支援センターのスタッフ、市内の様々な企業の講演、講義を様々に利用してほんの少し勉強も

しています。

寺キッズは、地域の子どもたちとその保護者たちの居場所作りとして始めました。毎月第2土曜日、お昼ご飯にカレーライスを提供しています。年齢に関係なく100円の会費でおかわり自由です。それぞれ食事が終わると100冊程の絵本を読んだり、近くの学童保育所のスタッフの協力のもと、けん玉を習ったり、本堂の内外を走り回ったりと賑やかに遊んでいます。また、幼児を連れた親子が何組も来てくれているのは、嬉しいことです。

寺キッズに、大阪市ボランティア活動振興基金から助成金をいただいたことはこれからの活動にいつその励みとなっています。



町中の小さな寺ですが、息長く地域の中で活動が続けていきたいと思っています。

(第1組勝光寺・足立敦子)





出向く教化のご紹介

第12組坊守学習会

私たち第12組坊守会では「定例学習会」として、毎年さまざまなテーマで学びの機会を設けております。今年度は「声明作法」をテーマに、昨年9月と10月の2回にわたり、山名彰英先生（第22組因超寺）をお招きしました。

儀式法要部

今回、私を含む若手坊守からの希望で、月忌参りにも対応できるよう、改めて正しいお作法を実践的に学ばせていただきたいとお願いしました。先生は資料をご用意くださり、丁寧にわかりやすく、そしてとても和やかに教えてくださいました。

第1回目の「おつとめの作法」では、「正信偈」の正しい読み方を教わり、改めて日頃の「くせ」に気づかせていただきました。第2回目は、会処寺院のお内仏の前で、お荘厳やお焼香の仕方について実践的に学び、坊守一人ひとりが先生にお作法をみていただき、ご指導いただくなど、とても貴重な機会となりました。

また、先生がご経験された月忌参りでのエピソードも、とても興味深く聞かせていただきました。その中で、お内仏の正しいお荘厳をお伝え

することも大切にしつつ、ご門徒さんの思いに寄り添いながら、お声がけをされているというお話を伺い、坊守としてたいへん勉強になりました。

学習会の後、まだ月忌参りの機会はありませんが、自坊の行事で、ご門徒さんの手本となるよう自信をもっておつとめやお焼香ができるようになりました。

「出向く教化」を通じて、私たちの思いにピッタリと応えてくださる、素晴らしい学びの機会をいただきました。

（第12組慈恩寺・墨林浩子）

中河内ブロック門徒会

組教化推進部

「一緒に何かしませんか」。それは、「正副門徒会長協議会」ブロック別意見交換会でのひとことだった。16

組・17組・18組・19組の正副門徒会長が「日ごろから八尾別院等で顔を合わせることが多い関係なのだから、一緒に何かできないだろうか」と意

見が一致したことが事の発端だった。

また4つの組の門徒会に加えて、八尾別院門徒会も参加。ブロック門徒会への出向く教化は初めてのことで、組教化推進部が事務局的役割を担い、2019年9月16日に「中



河内ブロック門徒会」がスタートした。

日ごろの思いやそれぞれの門徒会の課題、またお寺の未来についてなど忌憚のない意見が出された。「お寺と縁のなかった人たちが来てもらえるお寺作りが必要」「八尾のお速夜市のようなことができないか」「語り合える場が必要だ」等々の意見が出る中で、「自分は両親や祖父母がお内仏の前に座る姿を見て育っている、自然にお念仏の教えには触れている。しかし核家族となった今、そんな姿に触れることはない。そう

思うとへ私たちは次の世代に何を残していけるのか」ということが大きな課題になっている」との意見が全体の心に共通した。

「一緒に何かしませんか」から始まった集まりだが、お葬式が簡略化され、法事も質素になり、伝える場面そのものがなくなっている現代に真宗門徒として何ができるか。そんな大きな課題を持つことになった。

まさにこれから始まるブロック門徒会だが、どうなっていくのかが楽しみだ。

(第17組法観寺・廣瀬 俊)

ウェブ会議のお手伝い、いたします！

ホームページ実行委員会

もう以前のような生活には戻れない。そんな声をよく聞きます。私たちは好むと好まざるにかかわらず、ポスト・コロナの時代を生きていかなければならないようです。

教務所が閉鎖され、教区の諸会議もすべて止まってしまっていた自粛期間中、ホームページ委員会では「パソコン相談室」(第2・第4木

曜)の日に、実行委員でウェブ会議を行ってきました。

少なくともネットに繋がったスマートフォンやタブレット、もしくはカメラとマイクのついたパソコンがあればウェブ会議はできるのです

が、さまざまなシステムを試した結果、始めるのにはかなりハードルが高いということが判明しました。

またやはり顔をつきあわせての会議と違って議論やアイデアを出すには向いていないし、非常に疲れるといった、やってみなければわからないことも知りました。

今後、教区での会議も3密をさけるため広い場所で行い、Zoomというウェブ会議システムを使って自宅から参加することも可能になるようです。

あるいは法要や法話、講義などのネット配信や、リモート座談会なども今後必要になってくるかもしれません。

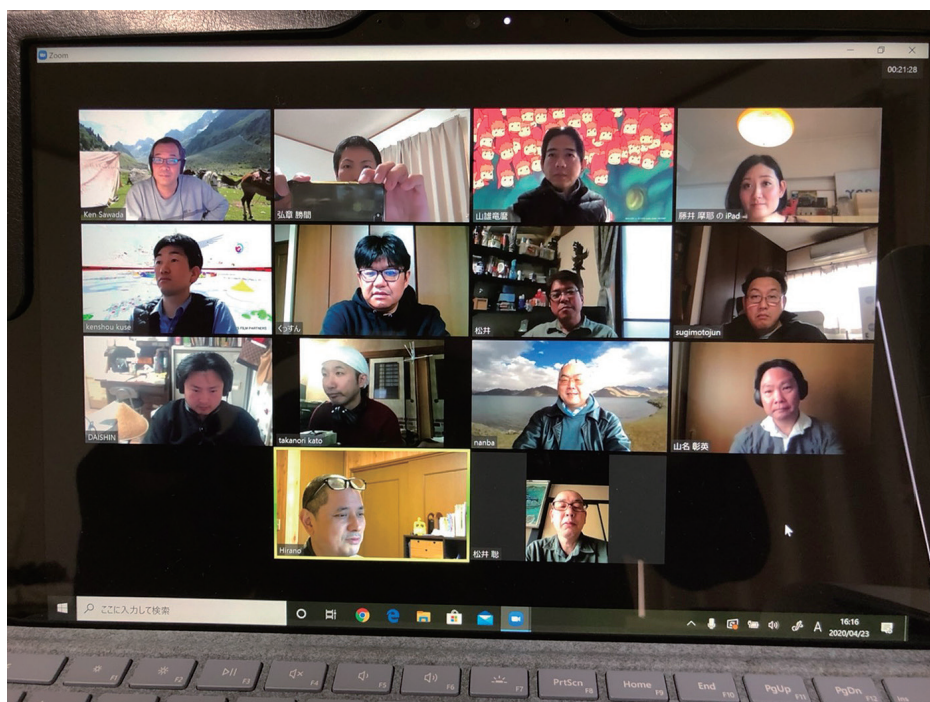
ホームページ実行委員会ではそのようなポスト・コロナ時代の教区・組・寺院の在り方に今後も注目し、さまざまなITを活用した教化活動を実験・試行していくつもりです。

実行委員会や

組、寺院から要請があれば、ウェブ会議やネット配信の設定の方法なども、出向いてお教えしていきたいと思っています。

どうぞお気軽に教務所(担当・藤井)までお申し出ください。

(第12組清澤寺・澤田 見)





「聞」の生活

門井 齊

蓮如上人は『蓮如上人御一代記聞書』の中で、「仏法は大切にもとむるよりきく者なり」（聖典878頁）と言われ、また「ただ仏法は聴聞にきわまることなり」（聖典889頁）とも言われています。

その意味では、この「聞」の一字は、私たち真宗門徒にとつての根本語であり、浄土真宗の教えに出遇った私たちにとつての生きる態度を表された言葉であります。

ところで私はこの「聞」ということについて、二つの聞ということが

あるのではないかと思っています。

一つは文字通り教えに聞いていくということです。善導大師は教えに聞いていく生活のことを「経教は鏡の如し、さくさく読みさくさく尋ねれば智慧を開発す」（『観経疏』序分義）と明確に言われています。「経教（おしえ）」とは、私たちにとつて鏡のことだと言われるのです。ただ私たちがイメージする鏡は自分の顔を見たりする手鏡か、顕微鏡とか望遠鏡など鏡にもいろいろありますが、このような鏡は決して自分の素顔や内

面をそのまま照らし出すことはありません。それは鏡の問題というよりも人間の問題なのでしょう。鏡で自分の顔を見ようとしても私たちは自分の顔が少しでもよく見えるように自分の顔をかざってしまうのです。「人間の内面なんてこわくて見れません。いまだ誰も踏み込んだことのない原生林みたいなものだ」と言われた方がおられますが、本当は私たちは自分のことは見たくないし知りたくないのかもしれない。他人の欠点は顕微鏡で見ると拡大して見ようとしますし、逆に自分の欠点はできるだけ見えないように望遠鏡で見ようとするのが、私たちではないでしょうか。

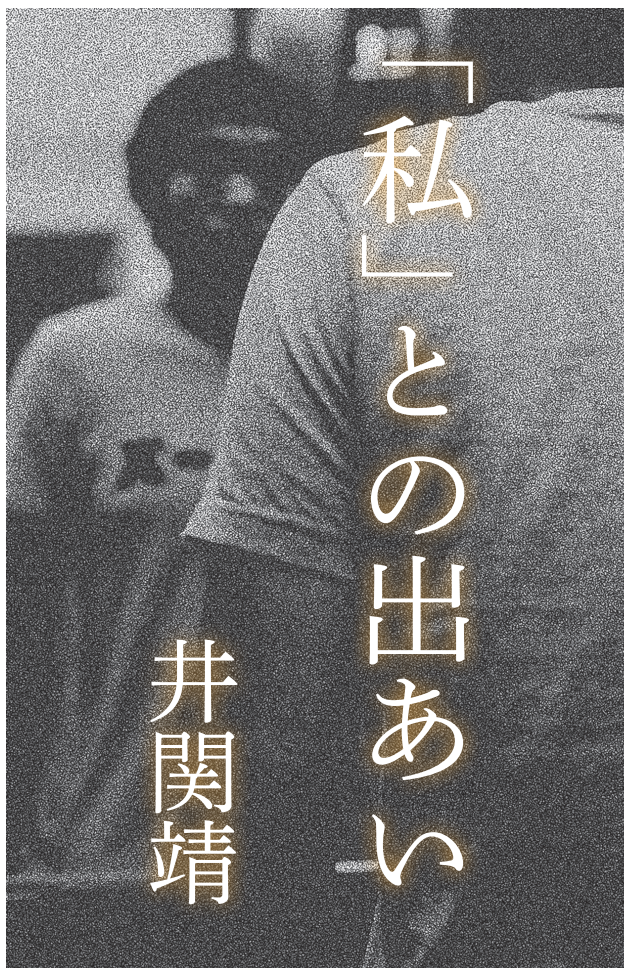
私たちは自分のことは自分が一番よくわかっていっていると思っていますが、実はもっとも近くてもっとも遠いのが自分であるということなのです。自分のことは自分にはわからない根源的闇、自分がかわいいという心に覆われて生きているのが私たち人間なのだと。その闇を照らし出すのが「経教」なのです。だからこそ私たちは常に経教を「さくさく読み、さくさく尋ね」ていく、生活習慣にまでなる歩みが大事なので

しよう。生活の片隅の聞法ではなく、行住坐臥、^{ぎやうじゅうあが}日常の生活全体が聞法生活になることが求められているのです。

ところで、はじめに「聞」に二つあると申しました。それは私たちには悲しいことに法の鏡を人間の鏡にしてしまうという愚かさ、したたかさがあるのです。それは教えによって自分の正体（我執）^{がじしゆ}が知らされたことに座り込むということがあります。救いに安心してしまうのです。わかったつもりになることによって、さらに深い闇（法執）^{ほうししゆ}に迷い込んでしまうのです。自分が見えなくなるのです。

このような光の病を破ってくれるのは現実だけです。老病死のことや、温暖化で破壊してしまった自然環境の問題、コロナ禍によって苦しんでいる社会不安などの一切の現実が、私たちを裸形の人間にかえしてくれるのではないのでしょうか。業縁の身を生きている事実^{じじつ}に立つということです。

教えに聞き、現実^{じじつ}に聞く。聞の生活に終わりはありません。



「私」との出あい

井関靖

私はつくづく「私自身」に出あいたがっているなあと思います。そして私以外にもきつとそうだろうなあと思うのです。

「私自身」に出あうって、私はいつも私に出あっているし、私のことは私が一番分かっているとおっしゃる方もおられるでしょう。しかし「私自身」に出あうって、中々容易なことではないと、私は思うのです。

先日健康増進のため、万歩計や心拍数等を測る機能の付いた時計が欲

しくなったのですが、あいにく新型コロナウイルス感染拡大防止のための自粛で、お店が休業していました。インターネット通販で商品を見てみると、定価よりかなり安く買えることが分かりましたが、それで購入することにはためらいがありました。

結局お店の再開を待つて、お目当ての時計を手に入れたのですが、その時つくづく感じたことは、この時計を決して価格だけでは買わない「私」なんだなあということでした。

実際に商品を手にとってみて、店員さんとやり取りをして、そこではじめて私が納得し、購入となりました。こういった経験は内容の違いはあれ、多くの方々が経験しておられることですし、時にそれを「こだわり」とも言ったりするのだらうと思います。

陶芸家・河井寛次郎さんの

物買つて来る

自分買つて来る

ということばがあります。ここで語られている「買う」は、決して金品のやり取りを言っているのではなく、「物買う」という縁を通じて、「買う」となった「自分買つて来る」、つまりそこに自分自身との出あいを表現しているように、私には思えるのです。

そしてここで、私の日常の一コマをことばにさせていただいて、私は「私」に出あわせていただいて、とても嬉しいのです。この誌面を読んださる方がいてこそだなと感謝しています。

「南無阿弥陀仏」というお念仏は、阿弥陀様の向こう側からの呼び声を聞くことですし、それは同時に私自身との出あいの場であると思います。

ことばにならなければ、私は永遠に阿弥陀様に出あうことも、自分自身に出あうこともなかったでしょう。ことばになつてはじめて、人間は事物を掴むことができ、感情に出あうことができるのです。

新型コロナウイルスの影響で、人と人が集まる（会う）ことがとてもにくい状況になっていますが、私が「私」に出あうためには、「私」をそのまま聞いて下さるもう一人の人が必要です。

みんなで知恵を出し合いながら、私が「私」になる会座を見つけていければと、切に願います。

(第10組慶徳寺／組同朋の会教導)

「生老病死」と

新型コロナウイルス

藤井満紀



世界中を震撼させた今回の新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの生活に大きな影響を与えました。コロナ禍で個人の抱えている問題に対しては、国の政策はお金やマスクをばらまくだけで、本当に困っている人の生活を守ってくれませんでした。そのことで、逆に一人ひとりが嫌でも自分の問題として考えざるを得なくなりました。「マスク」「消毒用アルコール」を求めて店を彷徨っ

たり、「コロナ離婚」という言葉が生まれたり、「家族とは果たして何でも理解し合う仲のいいものなのだろうか」、「自分も感染して死ぬのでは」とフツと不安に思ったりしたことはなかったでしょうか。

これまでの私たちは、子育てや教育、防災、ごみの処理から生老病死までも専門家や行政から提供されたサービスに「お任せ」し、ぶら下

がる一方で、それが自分の思い通りに叶わなければクレームをつけるという生き方。自分は責任を放棄して他人にすべて「押し付ける」ような生き方をしていたように思います。また、不安に思うことはよくないことで、求められる「いつも明るく未来を見つめる日本人像」から外れないように細心の注意を注いで生きてきたのです。

そのことが今回の新型コロナウイルス感染拡大で夢を見させられていたことに気づかされたように思えます。

私がハンセン病問題と出会ってから30数年が経ちます。ハンセン病患者とその家族が受けた差別。県からハンセン病Ⅱらい病を出してはいけないと、1930年代に「無らい県」運動が全国で進められました。患者は強制的に家族から引き離されて療養所に隔離され、残った家族も、結婚や就職を拒まれるなどの差別を受けました。

患者を排除したのは、「それが正しいこと」と信じた「普通の人たち」でした。ハンセン病回復者の豎山勲さんは「(新型コロナウイルスは)ウイルス

の全容がわからないことで恐怖が増したのではないかと。怖いと思つて身を守ろうとする。——中略——憎むべきは新型コロナウイルスであつて、患者ではない」と訴えます。(MBC 南日本放送/2020年5月19日)

不安や恐怖からくる、感染者やその関係者に対する誹謗・中傷、インターネット上での差別的書き込みが問題になっています。

人から与えられた夢ばかりを貪つてきたことに気づかされた時、「生老病死」から逃れられない私が見えてきました。すると、「自分も感染して死ぬのでは」という不安や恐怖を抱えたまま「あるがままに生きて行ける道」があるのだと気づきました。そのことは「共に今を生きることの大切さ」という言葉に繋がっています。

(第17組眞願寺／ハンセン病問題を共に学ぶ実行委員会)



中陰のお勤めと

グリーフケア

大橋知子

この度コロナウイルスの広まりによって、私が属している男女平等参画を考える実行委員会も女性住職の会が中止になりました。近年注目されているグリーフワークの学びの環境として『尊厳ある最期を迎えるために』というテーマで講師を迎える予定でした。

このグリーフワークとは、死別したご遺族の悲嘆からの立ち直りのプロセスのことであり、それに関わる

ことはグリーフケアと呼ばれていると学びました。

私は、仏教では古くから優れたグリーフケアのシステムがあると思います。枕経に始まり、お通夜、ご葬儀、中陰、その後に続く沢山の法要のことで。私は生老病死の中で、なぜ死だけこんなに多くの法要があるのだろうと思っていました。

数年前に、母の姉が亡くなりまし

た。クールでユーモアのある大好きな素敵な伯母でした。

その葬儀の時、私は自分だけ時間が止まっているように感じていました。その感覚は、ゆらゆらと頼りなく、亡くなった現実感がなく、まるで映画を見ているようでした。

その後、普通の生活に戻り、満中陰の案内を受けました。私は「ああ。伯母は亡くなったのだった」と思い出しました。伯母が亡くなったことを忘れていたのです。まだ伯母の懐かしい顔も声もはつきり思い出せました。

満中陰の法要中、「ああ、伯母は亡くなったのだな」と、その死に少し現実感が伴ってきました。

その後も法要の度に伯母の死を思いました。3回忌も終わった頃ようやく伯母の死を受け入れることができたような気がします。

この体験から、私は枕経に始まる沢山の法要は、死の受容に向けての優れたグリーフケアとしてもはたらいているのだなと思い始めました。

昔の先達はこのことをよくわかっておられたのでしょう。近親者であればあるほど失った衝撃と悲しみは

深く、死を受け入れるまでの期間は人それぞれです。

その為に沢山の法要があり、ご遺族はその度に死と向きあうことができ、自分のペースで、少しずつ本願のお話を聞きながら死を受容されていくのだと思います。

大谷派の勤行集に記されている中陰中の和讃が、ご遺族の悲嘆の変化に沿って選ばれていることに初めて気づきました。和讃を通して、悲嘆に向き合い、親鸞の示した広やかな本願の世界に気づき、死を少しずつ受容できるように考えられているのだと感じました。

最近、住職の代わりに坊守の私もこれらの法要に行き、ご遺族とお話する機会が増えました。大切なグリーフケアでもあることを心に留めながら、ご遺族であるご門徒さんと共に本願のもとで生きてゆくということを考えてゆきたいと思います。

(第18組遠慶寺／男女の平等参画を考える実行委員会)

前さきを訪とらう・第二回

内山宗之さんに聞く



教区門徒会長のご苦勞

教区の学習会の折、「住職の信心も、門徒の信心も、如来より賜る信心に変わりはない」とご自身の聞法精神を熱く語られたのは、大阪教区門徒会前会長・第3組西元寺門徒の内山宗之さん。

新教化体制も3年が経ちました。今一度、教区教化活動を確かめ合う手がかりとして、願いを持って教化にかかわってこられた諸先輩がたをお訪ねし、その思いをお聞きする企画「前さきを訪とらう」。今回第2回目は、門徒と寺族で共に創っていく浄土真宗の形を、内山宗之さんにお訪ねしてみました。

教区門徒会長で苦勞ということはないけれども、私はどうしても、推進員の連絡協議会を作らなアカンと思ってきました。なかったのは大阪教区の他、数教区だけやからね。ですから、教区のいろんな挨拶のときには、必ず住職方に「お願いしますよ」と「とにかくやってくださいよ」と、何回も何回も言うてきましたけど、これがなかなかやねん。

ただどね、実を言うと僕自身も最初は推進員養成講座に反対やったん

です。「なんで、聞法するのに資格が要るんや、そんなもの門徒会で十分ではないか」って思ってた。けど門徒会というのは行政やから、どうしても聞法する時間を取られるんです。あんまり、聞法と関係ないことをやってるわけだね。そういう意味で推進員は必要やと思った。その中で全国的に見ても、大阪に推進員連絡協議会がないというのは寂しいということ、教化委員会の中に項目を入れようやないかと動き出したんです。そして大阪教区としての推進協を作るという方向になったわけや。

教区教化委員会の事業

教区の教化委員会への関りで言う「教区同朋大会」は非常に愛着があります。最近、同朋大会の実行委員って、「寺族」が多くなっちゃったけど、昔はもつと門徒さんがいっぱい手伝ってばったんやで。段々少なくなってきた、気がついてみたら、会議のときによくしゃべってるのは住職ばかりです。門徒はほとんどしゃべらへんのや。それで、よけいに門徒が減ってきたような気がする。

だから、共同参画とかなんとか言うんだけど、実際のところは、住職の力が強くなって、門徒があまりしゃべらなくなってきた。言いにくい状態になってきている。正直言うたら、ホンマは聞法が中心になっていくような集まりにならないとダメなんです。門徒が中心になってやるようなそういう集会、あるいは講演会、こういうものを同朋大会としてやっていかないと。それがなくなってきたから、よけいに、住職の発言が強くなっているように感ずる訳ですね。

「安住莊あんじゅうそう」について

安住莊は昭和55年やったから、もう40年ぐらやってますね。私は親父から引き継いだだけなんです。この辺は昔、田んぼばかりでね。うちの親父も百姓しとって、ここは自分の土地やったんですよ。親父は熱心な聞法者で参議会の前身にあたる門徒評議会に出てたんですが、安住莊の聞法会へはそういう関係の人を誘うかというところではなくて、どちらかと言うとこの地域の人たちや

親戚の人を誘ってやってたんです。

現在では僕が教区へ出るようになったから、その関係で聞法慣れした人たちが来るようになりました。そういう意味では、教区のいろんな場で聞法している人たちの交流の場にもなってるんですね。法話が終わったら喫茶店行くねん。ほんでそこで今日はこうやったあややったって2時間ぐらいそこから話すねん。これがまた非常に楽しみやねん。聞法に来られる方は、若い層の方はあんまりいないんですが、いわゆる聞法初めてという人はいらっしやいますよ。この安住荘は、聞法会だけでなくて詩吟だとか、民謡だとか、俳句だとか、いろんな教室もやってるんです。なぜそういうものをやっているかというとね。やっぱり最初の段階で、聞法だけではどうしても人が集まらないから、いろんなことやって人集めてやろうと。だから案内状は毎月60枚、70枚ぐらい出しますよ。

伊東慧明先生との思い出

それとやっぱり伊東慧明先生の「歎異抄に聞く会」の存在が大きかつ

たですね。伊東先生があるところで「歎異抄に聞く会」をやっておられて、けど、そこがやめるということでは会場に困ってられて、それは渡りに船とうちへ来てもらうことになって、そこから35年。先生、「死ぬまでやるから」って言うたはった通り、最後まで辞めるとは言わはりませんでした。

伊東先生の講義を聞いてるとね、必ず曾我量深先生とか金子大榮先生が出てくるんですよ。そうするとね、僕らは曾我先生や金子先生は会ったことがないんやけども、なんか親しみを感ずるようになってくるんです。不思議なものです。それから、伊東先生にしょっちゅう言われたのはね、「うかうか聞いていてはいけません。親鸞聖人からずっと伝わってきた教えを、あなたが横を向いて聞いておって、間違った解釈をすれば、あなたの代以降の人たちが、間違った方を真実だと信じてしまうからです。だから、もっとまじめに聞きなさい」と、よく言われました。また「話は真剣に聞きなさい、理解できなければ徹底的に講師の先生に聞きなさい。聞法には『いい加減』という言葉はありません」と、妥協

を許さない先生でした。間違っていました。あなた以降の人はみな間違っています。これは大きな責任やと思います。これ「前を訪う」というでしょう。

聞法の利益

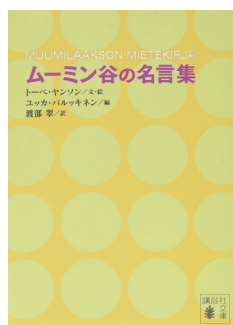
先ほども言いましたが、親父は熱心な聞法者でした。その父が73歳の時に脳腫瘍になったんです。手術してから10何年生きたんやけど、言ってる言葉が聞き取れなくなつて、そうするうちに手足も不自由になり、家の中でも車椅子で移動するようになったんです。それでも熱心な聞法者やったから、朝夕のお勤めは欠かしませんでした。で、僕がお内仏の前まで連れて行って、毎朝「正信偈」のお勤めをするんだけど、親父は何を言うてるかさっぱりわからんのです。呂律が回らない口で、よだれを垂らしながら、ページもロクに繰れないで、毎日毎日「正信偈」のお勤めを、私も後ろに座って聞いており

ました。それがね、最初の頃、気がつかなかったんだけど、何かの拍子で前へ回った時に気がついて、親父の顔を正面から見たときに、なんとも穏やかな顔してるんです。ものすごい安心感というかね、穏やかな顔して「正信偈」をお勤めしてるんです。日ごろ車椅子で不自由に暮らしているが、お内仏の前で「正信偈」をお勤めする時ばかりは、その不由から解放されているのだと思いました。そしてこれがやっぱり聞法することの利益（やく）じゃないのかなと思っただんです。僕は社会人の時は商社に勤めてたからね。全然聞法なんかクソくらくらえと思ってた。だから推進員なんかもそんなもの要らんと思ってたからね。だから、自分は聞法なんてことは考えてなかったんですけど、親父のその車椅子に乗りながら満足そうにお勤めする顔を見た日以降、私も父と一緒に「正信偈」を唱和するようになったんです。だから熱心にやりだしたのはその頃からですね。（文責・しゃらりん編集部）

全文は教区サイト「銀杏通信」でご覧になれます。

<http://www.icho.gr.jp/shararin/uchiyama>





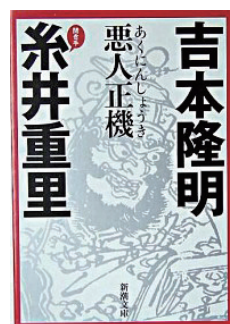
『ムーミン谷の名言集』
著／トーベ・ヤンソン
講談社文庫

紹介者：吉内利彦

〈ムーミントロールのパパは、家族とベランダが、
たまらなく恋しくなってきました。そしてとつぜん、
さとしたのです。(あそこにいてこそ、かぎりなく
自由で冒険心に満ち満ちていることができるんだ。
それでこそ、ほんものの父親なんだ)と〉
冒険好きのムーミンパパが冒険の途中で言ったセリフです。
僕たちが日常から非日常に憧れる思いや、
そうなったときの教訓を、おもしろおかしく
そして皮肉たっぷりに教えてください。

たくさんのシリーズが出ていますが、この本から
心惹かれる名言と出会い、本編を読んでいくのが
とってもおすすめです。

他にも〈初恋と最後の恋のちがいを、ご存じ？
初恋は、これが最後の恋だと思うし、最後の恋は、
これこそ初恋だと思うもの。……なのよ〉と思わず
甘〜いと叫びたくなる名言もあり、ムーミンの
世界に入っていきたい作品です。



『悪人正機』
吉本隆明・糸井重里／著
新潮文庫

紹介者：北川浩三

糸井氏が吉本氏にいろいろなジャンルの話題について話を聞く、という体裁です。吉本氏は著作に『最後の親鸞』『親鸞復興』『親鸞の言葉』などがあり、今回のタイトルが「悪人正機」ですからそっちのお話を期待して手に取ったのですが直接真宗に関する言及はありません。

しかし最初の章が「本当に困ったら泥棒して食ったっていいんだぜ」と始まり「この人は何を言い出すんだ?!」と気になって読んでしまいました。各話題ごとに10数ページの短い文章で広範囲なジャンルに独特の視点から切り込んでいます。対話でするので理路整然とした文章ではないのですが、話し言葉が生き生きとしていて楽しい。ちょっとした時間に少しずつ読んで自分でもいろいろ考えてみるとおもしろいです。

他の委員のおすすめ本は順次「银杏通信」に掲載します！

編集後記

桜からハナミズキへ、そしてツバメが飛び交い、萌える新緑が青空に映えて……◆春から夏への季節の移ろいは今年も同じなのに、目下社会は、感染が世界で拡大した新型コロナウイルスの脅威の前に、先の見えない不安の毎日である。かつて経験したことのない緊急事態宣言のもと、私たちは、外出の自粛を要請され、人と間近に関わることをできない日々を過ごしてきた◆人と人のつながり……それは、昨今、ますます人間関係が希薄になり深刻な社会問題になっている中で、本来いけば大切なものであるはずなのに、ともすればそれを否定する、残酷な試練とも思われる。しかし、今こそ私たちの人間性が試される時ではないだろうか◆今は、自分と大切な人の身を守り、アイデアとセンスと、そして、人に寄り添う心を忘れずにいたい。苦しみを共にする御同朋が一堂に集う文化が変わらないことを念じつつ。(藤林)

発行日：2020年 6月 30日

発行所：真宗大谷派大阪教務所
大阪市中央区久太郎町 4-1-11
TEL06-6251-4720

発行人：大町 慶華

編集：大阪教区教化委員会
広報・出版部



<http://www.icho.gr.jp/>